

茨木高校野球部

OB会報

発行
大阪府立茨木高校
野球部OB会

人としての成長を

高校39回 有井和彦



新緑の候、OBの皆様には益々健康のことと存じます。今回ご縁をいただき、和田先生から本会報への寄稿のお話を頂戴し、大変ありがたく光栄に思っております。わたくしは、高校39回の有井と申します。

私たちは今から35年前、ちょうどロサンゼルスオリンピックが開催されました1984年に茨木高校へ入学しました。入学当初は1学年、2学年上の諸先輩方のあらゆる面でのスピード感に驚いたことが非常に印象深く記憶に残っております。当時を振り返り真つ先に思い浮かぶのは、夏休みの練習が本当にきつく、特に強化練習と呼ばれていた期間は精神的にもハードな時間であったことだと思います。炎天下のグラウンドに寝転んで見上げる空はいつも殆ど雲がなく、一日の練習を乗り切るのが大変でした。練習後に当時の正門を出たところの「前店」で、清涼飲料を毎日たっぷり飲んで帰宅していました。このような感じで2年生の夏ごろまでは先輩方に引つ張っていただき、あつという間に過ぎてしまったように思います。

私たちが上級生となった新チームでは、まず取り組んだことは意外にも、皆で夏休みにも短期間のアルバイトをしてパッチングマシン購入のための資金作りをしたことでした。当時私たちがマシンの目新しいもので、色々な練習への利用価値が高かったと思います。さすがにあの時購入したマシンは、今ではもう無いでしょうが笑。

また、冬の間には筋トレにも重点的に取り組みました。公共の体育館へ通い、ウェイトトレーニングも行い、それなりに鍛えたりしていました。

そのようにして迎えた最後の夏の大会でしたが、なかなか結果には結びつかず、接戦の末に初戦敗退という結果に終わりました。

高校野球の場合、負ければ終わりという仕組み上、結果だけを求めるのは難しい面もあるかと思いますが、もちろん結果が伴えば言うことありませんが、結果も大切ですが、一方でその過程でどれだけ頑張ったか、努力したかと同じくらい大切だと思います。

このことはビジネスにおいても同じことが言えます。ビジネスパーソンであれば、与えられた目標に対して計画を立ててそれを実践していく中で、自分を成長させることができず、そして何らかの結果も求められず、私は長年カメラの設計開発の仕事に従事して日々さまざまなことが起きます。それら実践の中で、二つの目標をクリアしていく中で得られたスキルは確実に身につけていきます。

ですので現役の皆さんには小さな目標で構いませんから、練習試合などの実践を通じてそれを達成することを心掛けていただければと思います。その継続した取り組みが、人としての成長にもつながっていきます。結果とプロセスは難しい関係ではありますが、これから社会人になれる現役の皆さんにとっては今のうちからでも意識しておいて早すぎることはありません。

冒頭の今回のお話を頂戴したのは、私の息子も府立大手前高校の3年生で同じく野球をやっております。その関係で昨秋に練習試合をさせていただいたのがきっかけです。茨木のグラウンドに足を運ぶのは本当久しぶりでして、グラウンドや校舎は当時と全く変わりましたが、ユラオームなどは昔と変わらないままです。かしく思いました。部員数やグラウンドを使える時間など、同じような境遇の公立高校同士だと感じました。両校の春の大会も観戦させていただき、残念ながら共に強豪相手に敗戦を喫しましたが、学んだこともたくさんあったかと思いましたが、両校共に伝統ある公立高校だったので、夏につても勝つて校歌を歌っていたのだと思います。

終わりになりますが、現役選手の皆さんはこれから夏に向けて、和田先生、石丸監督のご指導の下で、充実した時間を過ごしていただければと思います。またやってくるあの暑い夏に、皆さんと球場でお会いできることを楽しみにしております。ご健闘をお祈りいたします。

部長より

高30回 和田充司



OBの皆様におかれましてはますますご

健勝のこととお喜び申し上げます。平素から茨木高校野球部にひとかたならぬご支援をいただき、誠にありがとうございます。さて、高校野球を始める状況が急激に変化しつつあると昨今感じることが多くあります。また、大会でも野球の試合とは思えないようなスコアが以前よりも多く見られるようになってきました。

「三」は、高校野球は今曲がり角にあると思えます。そんな中で変わらないもの、変えていけないものは何なのか。そのことを思いを巡らせながら茨高野球部を見つめています。

あるのが、この2年、茨高を含めたほとんどの近隣の高校が部員数を減らしています。また、大会でも野球の試合とは思えないようなスコアが以前よりも多く見られるようになってきました。

「三」は、高校野球は今曲がり角にあると思えます。そんな中で変わらないもの、変えていけないものは何なのか。そのことを思いを巡らせながら茨高野球部を見つめています。

あるのが、この2年、茨高を含めたほとんどの近隣の高校が部員数を減らしています。また、大会でも野球の試合とは思えないようなスコアが以前よりも多く見られるようになってきました。

「三」は、高校野球は今曲がり角にあると思えます。そんな中で変わらないもの、変えていけないものは何なのか。そのことを思いを巡らせながら茨高野球部を見つめています。

御挨拶

監督 石丸寛明



薫風の候、OB会の皆様におかれましては益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。平素より本校野球部の活動に格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。また、昨年には本校野球部OBで、監督も務められた池永先生が「第100回全国高等学校

野球選手権記念大会 育成功労賞」を受賞されました。長年にわたる高校野球の育成と発展に寄与された池永先生の栄えあるご受賞に心より一祝辞申し上げます。

さて、昨年の7月18日、豊中ローズ球場で行われた池田戦に3対4で惜敗しました。監督として初めて臨んだ夏の大会でしたが、目の前で勝利が遠ざかっていく感覚「勝てない相手ではなかった」という悔しさ、自らの不甲斐なさ、今でも思い出されます。それが消えぬ間に始動した現在のチームでは、主将の速水を中心に「夏大ベスト4」を目標に掲げました。主戦投手の佐野以外は入としてレギュラーでの出場経験がない若いスタートでしたが、それを強みに変え、もがきながら日々練習に取り組みで参りました。

迎えた秋季大会1回戦では山本を6対3で破るも、続く明星戦ではエラー6つで5点を献上し、2対5で負けを喫て負け、改めて力のなさを実感しました。オフシーズンは昨年同様、基礎的な身体づくりと徹底的なスイングを課題としながらも、ボールを使った守備練習を行い、根本的な守備力向上にも努めました。その成果もあってか、春先の練習試合では守備の乱れによる敗戦は減り、比較的縮まったゲームを展開できるようになりました。そんな中迎えた春季大会初戦、関大高を相手に4回まで2対3と1点にリードをゲームを進めました。5回にグラウンドスラムを含む7失点。昨春の大商大堺戦を彷彿とさせる展開で7回コールド負けを喫しました。「このままではいけない」部員たちはそう感じていることと思います。

春が移ろい、夏が訪れるのはあつという間です。残された時間をどう過ごすか、どう成長していくかは彼ら次第ですが、「夏大ベスト4」という目標に少しでも近づけるよう、そして高校野球を通して彼らが成長できるよう、私も尽力して参ります。

末筆ながら、今後とも本校野球部をどうぞよろしく願っています。ぜひグラウンド、そして球場の方へも足をお運び下さい。お待ちしております。